

ロバート・ケイガンの理解する世界秩序の現実とあるべき姿

小林 宏 晨

はじめに

I. ケイガンの目指す世界秩序

1. 冷戦後の世界
2. 歴史は終わったか
3. 平和と歓喜そして期待はずれ
4. パートナー交代
5. 独裁諸国の枢軸
6. グローバル規模の分裂
7. アメリカ覇権の利点と欠点

II. ケイガンの目指す世界秩序の臨時評価

1. ケイガンの現状 (Sein) 認識

おわりに

2. ケイガンの当為 (Sollen) 意識

- (1) 冷戦後の願望と現状
- (2) 新秩序への予測の背景と現状
- (3) 一九世紀的ロシアと二世紀的EU
- (4) 独裁制と国家的繁栄
- (5) 独裁制の魅力
- (6) 独裁制のクラブと民主制のクラブ

- (1) 現世界秩序におけるアメリカの役割

はじめに

カーネギー国際平和研究所のシニア・アソシエイトであるロバート・ケイガンは、独国際政治専門誌『Internationale Politik』の二〇〇八年七月／八月号に「終わるうとしない歴史…誰が将来の世界秩序を決定するか。民主制か、あるいはその敵対者か」¹のタイトルで論文を発表した。

ケイガンの結論によれば、冷戦の終焉は、予期に反して、世界に約束された民主主義時代をもたらさなかった。ロシア、中国あるいはイランの如き独裁政権が目立って力をつけてきている。従って、西側諸国は、自らの想定に従って世界を形成するのにかについて決定しなければならぬことになる。

本稿は、氏の思考過程を辿りながら、現代と近未来の世界秩序について検討したい。

I. ケイガンの目指す世界秩序

1. 冷戦後の世界

ケイガンによれば、世界は再び正常化している。

曰く、冷戦直後の数年は、我々に新規の世界秩序を誘惑にかられて一望する機会を与えた。その秩序内では、民族諸国家が共生あるいは消滅し、イデオロギー的紛争は解消し、諸文化は混合し、通商と交信は益々自由化する。現代民主世界は、冷戦の終焉が一紛争ばかりか全ての戦略的及びイデオロギー的諸対立を終わらせたと思ひ込んだ。諸民族及びその権力保持者達は、「新世界」の到来を予測した。

しかし、ケイガンによれば、それは幻想に過ぎなかった。

曰く、世界は根本的に変わったわけではなかった。どこでも民族国家はこれまで通り強力であり、民族主義的努力と熱情、歴史を特徴付ける諸国家間の競争は同様にびくともしていない。アメリカ合衆国は唯一の超大国に留まっている。その間に、大国間の国際競争が回帰した。

ロシア、中国、欧州、日本、インド、イラン、アメリカ合衆国及び他の諸国は、それぞれの地域における支配的地位の為に競争している。再び世界における威信と影響を巡る格闘が国際舞台を支配している。自由主義と独裁間の古い敵対も新たに再燃し、諸大国は、それぞれの政体に応じた立場を取っている^②。

より古い反目は、急進イスラム主義者と現代世俗諸文化及び諸国家間に発生した。イスラム主義者の観点によれば、現代世俗諸文化及び諸国家は、イスラム世界を支配し、しかも墮落させる為に侵入しているのだ。

これら三つの紛争相互作用と衝突によつて、国際接近の新時代の約束は、色褪せてしまった。我々は、ケイガンによれば、対立の時代に入り込んだ^③。

冷戦後初期の夢がしぼんでしまった状況に直面し、民主世界は、これにどのように対応するかについて決定しなければならない。ロシアや中国の如き独裁統治諸国が台頭し、しかも急進イスラム主義者がその闘争を採用する時代の中で、民主諸国は、深遠な、そして月並みな諸

問題によつて、分裂し、現実からかつ目を逸らされ、その存在目的とその道德基盤に疑問を提出し、権力と倫理を巡つて争い、遅滞の責任を他者に求めている。この不一致は、最も行ふ余裕のない時期に、民主諸国を弱体化し、その士気を削いでいる。歴史は回帰した。民主諸国は、歴史を形成する為に、協働しなければならぬ。さもないと、ケイガンによれば、他者が歴史を形成することになる^④。

2. 歴史は終わったか

九〇年代の初めは、ケイガンによれば、樂觀主義が理解可能で、しかもほぼ普遍的であった。

曰く、共產主義帝国の崩壊とロシアの民主制への明白な転換は、グローバルな接近新時代の鐘音のように思われた。突然に冷戦の主要対立者は、多くの諸目標、なかならずく経済・政治的統合への願望を共有した。

一九八九年天安門広場で始まった政治対立者達に対する暴力措置の後、しかも、一九九三年以降のロシアにおける不安定の表徴にもかかわらず、大抵のアメリカ人とヨーロッパ人は、ロシアと中国が自由化の途上にあると

信じた。

ボリス・イエルチン下のロシアは、経済の自由主義モデルと西側との密接な団結に義務付けられているように思われた。

中国指導部によって行われた経済開放に、権力者に合致する、あるいはしないに関わらず、必然的に政治開放が続くことが期待された。^⑤

このような決断主義は、ケイガンによれば、冷戦終結後の思考にとって典型的であった。大抵の人々は、グローバル化した経済において、諸国家が競争力を維持し、生き残ろうとする場合、先ず経済的に、後に政治的に自由化する以外の選択肢を持たないと信じていた。国民経済が一定の国民一人当たり所得に到達した場合、拡大する中産層が法的及び政治的共同発言権を要求し、支配層は、国家の安寧の為に、この権利を付与せざるを得ないことになる。

民主的資本主義が台頭する諸社会に対する成功モデルなので、究極的には全てがこの方法を採用することになる。諸理念の闘争において、自由主義が実行されることと

なった。

フランシス・フクヤマの著名な記述を用いるならば、「歴史の終わりににおいて、最早自由民主制に対するイデオロギー的競争者は存在しないのだ。」^⑥

冷戦後最初の数年における経済的・イデオロギー的決断主義は、ケイガンによれば、政治と期待を規定した二つの一般的想定をもたらした。

ひとつは、人類進歩の不可避性、つまり歴史が一方方向のみに向かって進行することに対する不断の信奉である。啓蒙主義から生まれたこの確信は、二〇世紀の共産主義とナチスの残忍性によって一時的に消されたが、共産主義の崩壊によって再生された。

他のひとつは、忍耐と自重の命令である。独裁に対決し、批判する代わりに、これらを世界経済に結びつけ、法治国家制度と強力な国家的諸制度の創設を支援し、人類進歩の不可避な諸力の奇跡を作用させるほうが良いとする。^⑦

世界が啓蒙自由主義の諸原則に接近したとき、冷戦終

結後の大任務は、ケイガンによれば、一七世紀から一八世紀にまで遡る啓蒙主義の約束を充足すべき法律と諸制度の給付力ある国際システムの構築の中に存在した。カントが想定したように、自由主義的諸政府の世界は、戦争なき世界である。グローバル化の新時代における商品や諸理念の自由な流れは、人間の間のあらゆる紛争に対する抗毒剤である。モンテスキューは、通商の自然的効果が平和の創設にあると考えた。この啓蒙主義の古い夢は、突然間近に迫っていた。何故なら、諸大国の地政学的及び戦略的利害の推定された収斂が国際自由主義の輝かしい勝利に至ったからである。

一九九一年ジョージ・H・W・ブッシュ大統領(父)は、「東西南北における世界の諸国が繁栄し、調和の中に生活でき、法の支配がジャンゲルの法則を排除し、諸国家が自由と正義に対する共同責任を承認する新世界秩序」について言及した。それは、「我々がこれまで知っているものとは全く異なる世界」なのである。⁹⁾

3. 平和と歓喜そして期待はずれ

世界はとりわけ変わって見えた。何故なら、ケイガン

によれば、ソ連が変わったからである。

曰く、共産ソ連がそれほど劇的に崩壊せず、しかも、この国が一九八九年以降これほど深刻に変遷しなかったなら、何人も、歴史の終わりを要求するようなアイデアに到達することはなかったはずである。ソ連の、そして後にロシアの対外政策の変遷は、注目に値した。もしもロシアが、伝統的大国政治から離れることが出来たとすれば、他の世界もこれが出来たはずである。

マーチン・ウォーカー¹⁰⁾は、一九九六年「地(理)政(治)学(Geopolitik)の時代」がいわば「地(理)経(済)学(Geökonomie)の時代に道を譲った。新たな男性シンボルは、輸出、生産性及び成長率であり、しかも国際的大統合は、経済諸超大国間の通商条約である。」と述べた。つまり、今や伝統的な国家的利害の抵触は克服された。

政治学者ミカエル・マンデルバウム¹¹⁾によれば、欧州連合(EU)は、二一世紀の国際秩序システムの前味に過ぎない。

自由主義者で国際関係の専門家のG・ジョン・アイケンベリー¹²⁾は、冷戦後の世界を「世界のどこにおいても民主制と自由市場が咲き、進歩的歴史的勢力としてのグローバル化が根付き、これに対し、イデオロギー、民族主義及び戦争が最低水準に到達した状態」と記述した。「世界秩序のリベラルヴィジョン」が実現したのである。¹³⁾

人類史における新時代への大きな希望は、ケイガンによれば、国際状況の特異な構成を裏づけとしていた。

曰く、突然、いずれにせよ一時期の間、諸大国間の伝統的敵対関係が欠落した。数世紀に渡って、影響、繁栄、安全、威信及び名譽を巡る大国の葛藤が紛争と戦争の主要原因であった。

冷戦の間、四〇年以上にわたり、対決は兩超大国に限定された。世界に強いたこの強固な二極秩序は、自然的展開に合致して、如何なる他の大国も台頭させなかった。そこで一九九一年ソ連が崩壊し、突然アメリカ合衆国のみが残ることとなった。ロシアは弱体化し、国内気分は迷入り、国内政治はカオス状態が続ぎ、経済は破産管理人によって清算され、しかもその軍事力も低下の一途を

辿った。

中国は、天安門広場事件後は孤立し、内向きの姿勢を続け、その経済展望は、不確定で、しかもその軍事力は、現代ハイテク戦争遂行には未だ充分な装備ではなかった。八〇年代に、台頭する経済超大国と看做された日本は、一九九〇年最大の株と地価の下落を体験し、一〇年以上にわたる節約の時代を余儀なくされた。

インドは、未だ経済革命に到達していなかった。

大国的対決の最も重要な場である欧州は、権力政治を拒否し、自らのポストモダン諸制度を完成させる方を優先課題とした。¹⁴⁾

ヘンリー・キッシンジャーを始めとする地政学的現実主義者達は、この構成が永続し得ない点を指摘し、しかも、国際競争は、人間の本性部分であり、遅かれ早かれ再生することになると主張した。

前記の指摘に対するケイガンの論旨曰く、確かに、—アメリカ、中国、ロシア、日本及びインド間の概ねの勢力均衡を伴った—来るべきグローバル多極性に関する予測は当たらなかった。それでもなお、現実主義者達は、

人間の不変の本性を正しく評価した。世界は、根本的な変遷ではなく、諸国家及び諸民族間の終りなき競争闘争において単に休止したに過ぎない。

この闘争は、九〇年代に次々と頭目を目指す国家が舞台に現れるに至つて、再開された。先ずは中国が、次にインドが、突然先例なき経済成長を始めた。この経済成長は、両国に、緩慢ではあるが、本質的な通常戦力及び核戦力の増強を可能にした。

日本においては、二一世紀初頭に、経済が徐々に回復した。日本は、外交的にも、軍事的にも世界の舞台でより積極的な役割を演じ始めた。

更に、石油と天然ガスの輸出を土台として、経済的貧困から恒常的経済成長へと変遷したロシアがこれに続いた。¹⁵

4. パートナー交代

今日では、ケイガンによれば、国際秩序が新たな権力構造によって組替えられている。つまり、中国の戦略家が表明しているように、我々は、「唯一の超大国と複数¹⁶の大国」が並存している世界の中に生きているのである。

しかも今日、民族と民族主義自体は、決してグローバル化によつて弱体化していかないどころか、権力を伴つて回帰している。バルカンと旧ソ連地域では、依然として人種の民族主義が彷彿としている。新世界秩序に代わつて、諸大国の対立した利害と努力が再び一九世紀の外交官にとつてはまったく珍しくもない、同盟、反対同盟及びパートナー交代を伴つた巧みな舞踏へと導くのだ。ここでは将来の反目の蓋然性が極めて高い。¹⁷

これらの諸反目のひとつは、ロシアの西側から南西側で予測される。つまりグルジア、ウクライナ及びモルダヴィア、バルト三国、ポーランド、ハンガリー、チェコ共和国、コーカサス、中央アジア及びバルカンにおいて、勢力を回復したロシアが、EU及びアメリカと影響力を巡つて競争している。

西部ユーラシアは、再び競争地域となった。歴史は、二〇年前に、ロシアで最も劇的に終わりとなったが、今日では、同地で最も劇的に回帰した。

ロシア内部での自由主義への転機は、停止し、しかも反転した。

同様のことは、対外政策にも該当した。ウラディミール・プーチンへの権力集中化は、イェルチンとコシレーフで開始された民主的対外政策から、統合に向けて開始された対外政策への転換と一致した。今日ロシアは、大国民族主義に、従って、大国の伝統的計算と野心に回帰した¹⁸。

ロシアとEUは、確かに地理的には隣国であるが、地政的観点からすれば、異なった世紀の中に生きている。その重大事項が権力政治を克服し、世界を法律と諸制度に基く秩序に導く二一世紀のEUは、未だに大幅に一九世紀の国家であり、しかも古い権力政治を実践しているロシアに對置しているのだ。

EUのポストモダンな「ポストナショナル」な精神を以つて、ヨーロッパは民族主義と権力政治が大陸を二回も破壊した恐るべき二〇世紀の紛争に対応した。

これに對してロシアの態度は、ソ連崩壊後の「ポストナショナル政治」の予測された不能によって刻印されている。

ヨーロッパの悪夢は、二〇世紀の三〇年代であり、ロ

シアの悪夢は、九〇年代である。ヨーロッパは、その諸問題の解決を民族国家とその権力の克服に求めるに對し、ロシアにとつての回答はその再現にあるのだ¹⁹。

そこでケイガンは、EUの如き二一世紀に所属する国家形態がロシアの如き伝統的國家の挑戦を受ける場合、何が起るかと自問する。

その回答曰く「我々は来るべき数年の中に見るようになる。しかし諸紛争の概観は既に表示されている。つまりコソボ、ウクライナ、グルジア及びエストニアを巡る外交的権力計測、ガス及び石油パイプラインを巡る紛争、ロシアとイギリス間の醜い外交対決、冷戦後に見られなかったロシア大軍事演習の再開がこれである。

スエーデンの外交エキスパートによれば、「我々は、現在地政学時代に生きている事実を否定することができないのだ。」²⁰つまり、冷戦後に支配した認識と期待とはかけ離れた時代となっている。

九〇年代に自由民主諸国は、より豊かなロシアが内政及び対外政策において、自由なロシアとなることを確信していた。しかし歴史は、通商と繁榮の拡大が必ずしも、

諸国間のより大きな調和ではなく、しばしばより大きな世界規模の競争に導くことを示している。

冷戦の終結後、諸国が地政学的競争への対案として、経済統合を推進し、軍事力や地政学的対決の「ハード」権力に対し、通商関係や経済成長の「ソフト」権力を優先させるとする願望が存在した。しかし諸国は、賛否決定を行う必要はないのだ。未だに他のパラダイムが存在しているからである。

一九世紀後半、日本の明治維新のスローガンは、「富国強兵」であった。この場合、諸国は、地政学的闘争を放棄するのではなく、この闘争を成功裏に遂行する為に、西側諸制度への経済的統合と順応を目指すのである。中国はこれに対する自前の表現を持っている。「富国強軍」がこれだ。

5. 独裁諸国の枢軸

諸大国間の対立終焉への願望と同様に、イデオロギー的「歴史の終わり」への期待も、ケイガンによれば、その短命が証明された一連の歴史状況を土台としていた。

曰く…共産主義が歴史の舞台から降りたが、民主制に対する強力な挑戦者達は舞台に留まった。国家的繁栄と独裁制の増大は究極的に互換性があることが証明された。独裁者達は、学習し、かつ順応するのだ。

ロシアと中国の独裁制は、自由経済を認可し、しかも同時に政治活動を弾圧する方法を発見した。両体制は、介入が自己に不利に作用することを知っている場合、人間が金を稼いで、政治から遠ざかることを理解した。新たな豊かさは、独裁諸体制により多くの情報統制を付与する。例えば、テレビ放送の独占化とインターネット監視を通して、しかもこれがしばしば、万難を排して独裁体制との商売に到達しようとする外国系コンツェルンの支援を伴って行われる。

長期的には、確かに豊かさの増大が政治的自由化に導きえる。しかし何時の日かについては分かりえない。何等かの戦略的あるいは地政学的比重を持つに至るまでにはあまりにも長すぎる事が可能である。古い笑い話によれば、ドイツは、一九世紀の終わりに経済近代化をスタートし、六〇年後に民主制を達成した。問題は、その間の時代である。

換言するならば、世界は、変化を期待している。しかし現在では、中口の二国が総じて一五億以上の人口と第二及び第三番目の軍事力を伴った独裁によって統治されており、しかもこの体制は、見通しえる将来も権力を保持しえると思われる。²²

独裁制が国際的にいかなる魅力もないと信ずる事は、ケイガンによれば、間違いである。

曰く、数十年にわたる注目に値する経済成長の後、中国は今日、その経済発展モデル、つまり、ますます開かれた経済と閉鎖的な政治体制の組み合わせが、多くの諸国にとって、成功を約束する選択肢であり得ると主張する事ができる。いずれにせよ、政治的自由化に譲歩する必要なく、豊かさや安定を導入する成功裏の独裁制モデルがこれなのだ。

『主権的』民主制のロシアモデルは、中央アジアにおける諸独裁制にとって極めて魅力的である。若干の欧州諸国は、ロシアが『主権、権力及び世界秩序』への別の

アクセスを提供し、EUに対するイデオロギー的対案と看做され得る事を恐れている。

左右の独裁制が自由主義に屈服した八〇年／九〇年代には、独裁モデルは、失敗と判定された企てであるかに思われた。中国及びロシアの成功を背景として、今日このモデルは、より良い選択であるかのような作用をしている。²³

中国とロシアは、確かに積極的なイデオロギー輸出を行っているわけではないが、ケイガンによれば、独裁者達に逃げ場を提供できるし、しかも民主諸国が独裁者に反撃する場合に、実際に逃げ場を提供している。

ロシア外相セルゲイ・ラヴロフは、『諸理念の市場において、多様な価値システムや開発モデル間に真の競争の場が存在する。』と述べた。ロシアの観点からして喜ばしい知らせは、『西側諸国がグローバル化過程においてその独占を失った事である。』²³

この競争がベルリンの壁の崩壊を以って終結したと考

えた西側世界にとつて、これは驚きであるかもしれない。世界の民主主義諸国は他国における民主制と啓蒙の諸原則の支援をめぐる自らの努力を地政学的競争の一面面とは考えない。民主主義諸国は、結局対立する諸真実ではなく、『普遍的諸価値』のみを認める。従つて民主主義諸国は、如何にして、その富と権力を、その諸価値と諸原理の受入れを他国に強いる為に投入するかについて必ずしも分かつていない。

戦争には至らないかもしれないが、それでも尚、民主的諸政権と独裁的諸政権間のグローバルな競争は、二一世紀の世界を決定付けることになる。諸大国は、一定の側につく決定を行い、一方あるいは他方の陣営と一体化しようとする。

冷戦時代に中立あるいはソ連友好的である事を誇りにしていたインドは、今日では寧ろ民主的西側に所属していると感じている。日本も近年、共同の諸価値を他のアジア及び非アジア民主諸国と分ち合う民主大国として自己を位置づける為にあらゆる努力を傾注している。

日本においてもインドにおいても、民主世界に所属する願望は真正のものである。同時にこの願望は、地政学

的計算に従っている。何故なら、他の諸大国との連帯を固定化する試みは、独裁中国との両国の戦略的競争に際して、有利に作用しえるからである。²⁵

ケイガンによれば、国際事項において完全な均衡は存在しない。

曰く、現代の二つの所与、つまり、諸大国間の対立及び民主制と独裁制間の競争は、何時でも同じ連合をもたらずとは限らない。このように民主的インドは、独裁的中国との地政学的競争において、中国に対する戦略的利益を与えない為にミャンマーの独裁者を支援する。インドの外交官達は、好んで他の大同土を対決させ、時にはロシア、時には中国と仲良くする。民主国家たるギリシャとキプロスは、オーソドックス東方教会における其の仲間達と、文化的連帯ばかりか、経済的利益からしても、ロシアと緊密な関係を維持している。しかもアメリカ合衆国は既に古くから、戦略的及び経済的諸根拠からして、アラブの独裁諸国及びパキスタンの軍事権力者と同盟を維持している。

冷戦時代に於けると同様に今日でも、経済的考慮と文

化的・精神的近親関係が、イデオロギー的方向付けを邪魔している。²⁶

6. グローバル規模の分裂

しかし今日の世界では、ケイガンによれば、一国の統治形態は存在しても、その『文化的所屬』あるいはその地理的状况、又その地政学的方向付に関する最も確実な解明も存在しない。

アジアの民主主義諸国は、今日アジアの独裁諸国に對抗して欧州の民主主義諸国と同盟を結んでいる。中国の観察者達は、『東北アジアから中央アジアまでに及ぶ』アメリカ友好的民主諸国の「V型帯」を目のあたりにしている。二〇〇七年にアメリカ、インド、日本、オーストラリア及びシンガポールが共同軍事演習を遂行したとき、中国及び他の観察者達は、『民主制の枢軸』と名づけた。これに対し日本の首相は、日本からインドネシアを越えインドに至る『自由と繁栄のアジア的ブリッジ』と呼んだ。

ロシアの政府代表は、自らの言によれば、NATOと欧州安保協力機構が冷戦時の如く『ブロック政策』を継

続していることに驚かされている。しかしロシア自身、上海協力機構（SCO）を『反NATO』同盟及び『第二ワルシャワ条約』と表示している。二〇〇七年の会議で上海協力機構は、五つの独裁諸国（中国、ロシア、ウズベキスタン、カザクスタン、タジキスタン）にイランを加えた会議を行った。

アセアン諸国が二〇〇七年ミャンマー問題を扱ったとき、機構の意見は分裂した。日本の支援を受けて、インドネシアやフィリピンの如き民主諸国がミャンマーへの圧力を主張したのに対し、独裁諸国ヴェトナム、カムボジア、ラオスは、中国の支援を受けて、いつかは自分に向けられ得る、先例を回避する努力を行った。²⁷

独裁者のクラブと民主制の枢軸間のグローバル規模の分裂は、国際システムに対する広範囲にわたる帰結を伴う。そこでケイガンは、いったい（現代世界を）未だ『国際共同体』と述べる事が可能だろうかと自問する。

曰く、この概念は、国際法的行動規範に関する了解、国際関係の倫理、国際的良心を前提とする。今日では、諸大国間に合意が欠落している。

今日では、大きな戦略的諸問題——例えば、干渉すべきか、制裁を行うべきか、あるいは諸国を外交的に孤立させる事を試みるべきか——について訴えられる、あるいは実行できる国際共同体が存在しない。とりわけこれが明らかになったケースは、民主的西側諸国とロシア、中国及び非欧州独裁諸国を分けたコンボ戦争であり、今日では、ダルフル、イラン及びミャンマーとの関連で示されている。つまりこのような場合に、国連は機能しないのだ。²⁸

今日強力に前面に現れた国家的及びイデオロギー的競争の重圧を通商関係のみで緩和できると考える事は間違いだである。通商関係は、空気の無い空間で行われるものではなく、支配的地政学的及びイデオロギー的紛争との恒常的相互作用下に置かれている。

諸国家は計算機ではなく、そこに住む人間を国家にする人間の全ての本質の様相を担っているものである。

本質の様相とは、愛、憎しみ、名誉欲、恐怖、名誉、羞恥、祖国愛、イデオロギー及び信仰の如き人間の計り得ない（感情の）動きであり、今日でも、数百年前でも、

その為に人が戦い、そして死ぬものなのである。²⁹

この人間感情の動きを最も明確に示すところが、ケイガンによれば、とりわけ近東イスラム世界である。

曰く、イスラム主義者がユダヤ・キリスト教的西側と結びつけるモダン化、資本主義及びグローバル化の強力かつしばしば顔のない力に対する急進イスラム主義者の戦いは、現国際システムにおける第二の大紛争である。しかもこの戦いは、収斂パラダイムに対する徹底的な拒絶なのである。何故なら、正にこの収斂パラダイムは、急進イスラム主義者によつて拒否されており、自由世界によつて提唱されている『普遍的諸価値』の觀念の形態でもある接近であるからだ。³⁰

バーナード・ルイスは、イランにおけるイスラム革命の目標が『他国支配時代にムスリム諸国と諸民族に強制された全ての行き過ぎを「掃し、神から与えられた真のイスラム秩序を再現する事」であった、と述べている。『この不信仰の諸国からの輸入の』ひとつが民主制なのである。ファンダメンタリスト達は、イスラム世界をキリスト教的西洋、自由主義、及びモデルネがイスラムを

汚染した以前の時代に回帰させようとしている。³¹⁾

しかしこの目標は、ケイガンによれば、到達不可能なのだ。

曰く、たとえ、他の世界がそれを許したとしても、イスラム主義者達は、時計を一四〇〇年も逆回しすることができない。世界はしかもこれを許さない。アメリカも他の諸大国も近東に対する統制をファンダメンタリスト勢力に委ねないし、しかもそれは、部分的に、この地域が世界の他の分部にとつて最重要戦略的意義を有しているからである。より重要な点は、近東地域の大部分の人々が決して一四〇〇年の過去に回帰するのではなく、モデルネも民主制も了解済みである事実である。ある一国全体が、たとえ其の多数が望んだとしても、モデルネに対して、自己を全く隔離できるとは考えられない。つまり世界には長い闘争が続くが、しかしそこでは急進イスラム主義者の願望は決して充足される事はない。何故なら、アメリカも、欧州も、ロシアも中国も、あるいは近東の諸民族も、それぞれの望みを放棄する状況にもないし、又放棄しようとしてもしていないからである。現代の

諸大国は、イスラム過激主義者達が要求しているほどに、撤退する事ができない状況にあるのだ。³²⁾

7. アメリカ覇権の利点と欠点

そこでケイガンは、この世界秩序の中で、アメリカが如何なる役割を演ずべきかと自問し、以下のように回答する。

曰く、国際的世論調査は、世界全体で、アメリカの役割を縮小し、より多くの多極性と平等に作用しようとする強い願望が存在していると説明している。アメリカ内部においても、自制、野望の抑制、自己の限界に対する明確な意識への呼びかけが高まっている。

しかし混乱の新たな時代の節目に立たされている世界において、多分、瑕疵に取り付かれている民主的超大国が重要な、それどころか放棄できない任務を遂行すべきではなからうか。アメリカの優越的地位は、間違いなく、即急には消えてしまわない事が確実なのである。何故なら、ケイガンに従えば、とりわけ世界の多数が必ずしもこれを、つまりアメリカの優越的地位の消失を、望まな

いからである。³³⁾

世論調査の結果にもかかわらず、近年アメリカの古い同盟諸国と新しい同盟諸国への関係が改善されている。これが良い事かとの質問に対する回答は、何と比べてかとの反対質問となる。諸国家がより平等であり、よりリベラルであり、より民主的であり、より強く平和に義務付けられ、国際法の諸命令に対しより従順であるより完全な国際的自由主義的秩序と比較するならば、現状のアメリカ支配の秩序は負けているかもしれない。

しかし現実の対案はどのように見えるであろうか。アメリカは、利己的で、限定的にしか行動できないし、他の諸国の利益の邪魔もし、傷つけえし、実際に傷つけてもいる。しかし、ロシア、中国、インド、日本あるいは欧州が多極世界において、その権力行使に際して、より賢明に、あるいはより道徳的に行動するだろう事は全く証明されていない。このような多極的世界秩序の新たな一面は、これらの諸大国のほとんどが核兵器を持っている事実である。その事は、諸大国間の戦争の蓋然性を最小限にする事が可能であるか、あるいは、この蓋然性を

をより壊滅的結果とすることも可能である。

東アジアの大抵の諸国は、信頼性があり、指導的役割を演ずるアメリカが安定的、平和創設的影響力を行使すると言う点で一致している。

この地域の支配的勢力としてのアメリカを排除しようと努力している中国でさえも、アメリカの撤退が名誉欲の強い、独立した、民族主義的の日本を自由に行動させるというジレンマに立たされている。³⁴⁾

アメリカが世界最強の国家に留まっても、国際舞台から降りる場合には欧州に対しても不安定な影響を及ぼす事になる。ロシアは、自己の辺境における反抗的な諸国に対して、より尊大かつ潜在的に暴力的に対応する事を試み得る。³⁵⁾

近東におけるアメリカのより弱い立場がより多くの安定化に導くという考えも、ケイガンからすれば、同様に楽観的に過ぎる考えである。

曰く、そこでは少なくとも二〇〇〇年以来、内外勢力が

影響力行使をめぐって戦い、しかもイスラム・ファンダメンタリズムの台頭は、一つの新たな驚異的側面を付加したに過ぎない。アメリカが撤退するかあるいはその兵力を削減するに従って、この地域あるいはその他の地域の別の勢力が即座に真空を満たすことになる。³⁶

世界秩序は、諸理念と諸制度のみを土台としているものではなく、権力構成によって刻印されている。

九〇年代の世界秩序は、第二次世界大戦と冷戦後の世界における権力配分を反映している。

今日の秩序は、独裁制を含む諸大国の増大する影響に対応している。

他の権力構成、つまりロシア、中国、アメリカ、インド及び欧州諸国を伴った多極世界は、これに共同参画する諸勢力の利害に合致する他の諸規定と諸規範を伴った固有の秩序をもたらす事になる。

そこでケイガンは、この国際秩序が改善を意味するのかと自問する。

これへの回答曰く、多分ロシア、中国あるいはイラン

にとつては改善かもしれない。これが、現在のシステム以上にアメリカ及び欧州における啓蒙民主主義者の利害に合致するかは疑問である。³⁷

現代の大誤謬は、ケイガンによれば、自由主義的世界秩序が諸理念の勝利と人類進歩の自然的展開に基づいているとの確信である。

曰く、当然のことに、このような考えは、非常に魅惑的であり、啓蒙主義の世界観と深く結びつき、我々自由世界の住民全てがその産物である。当然のことに、多くの潜在力が自由民主制の理念と自由市場経済の中に潜んでいる。長期的に、そして全てがうまくいく場合に、前記二者（自由民主制と自由市場経済）は、対案の世界観に対して、自己貫徹すべきものである。しかもこの二者が、物質的財を提供するばかりか、とりわけ人間本性の全く本質的側面に対応するからである。その本質的側面とは、個人的自立、承認、思想の自由、良心の自由への欲求である。自由民主諸国からなる世界が、徐々に、この自由民主的諸特性を反映する国際秩序をもたらすべき

とする期待も論理的である。

冷戦の終焉後全ては、進歩という際立った虚飾に集中していたので、この進歩を初めて可能にした装備や資金や棍棒を看過した。進歩が不可避なものではなく、勝利そして敗北した会戦、成功裏のそして弾圧された社会運動、移植されたそして否定された経済実践の結果である事実を誰もが気づかなかつた。

民主制の広がり、経済的及び政治的發展の一定の不可避な過程のみに従つたものではない。いったいこのような進化的過程が予言可能な段階と周知の原因と結果を伴つて存在しているか否かさえ我々は知らない。³⁸

しかし我々が知っている事は、ケイガンによれば、自由民主制へのグローバル規模の移行が自由民主的理念に優先権を与えた諸国家及び諸民族への勢力均衡における歴史的移行と時を同じくしている事実である。

この移行は、第二次世界大戦におけるフアシズムに対する民主的諸勢力を以つて始まり、冷戦における共産主義に対する民主諸国の第二の勝利が続いた。

この両勝利の後に発生した自由世界秩序は、自由な諸

勢力の世界的規模の圧倒的優勢に合致した。

それでもなおこれらの勝利は必然的なものではなく、又永続的でなければならぬものでもない。今日、独裁的諸大国の再強化は、イスラム急進主義の反動的諸勢力と一緒にあって、この（自由世界）秩序を弱め、しかも、この秩序は、来るべき数年及び数十年の間に益々弱まる危険に晒されている。³⁹

歴史の一時点である第二次世界大戦後、新たな世界秩序への希望に満ち満ちたとき、ハンス・モルゲンソウは、何時か「最後の幕が下り、最早権力政治が演じられないようになる」という考えに対して警告を發した。⁴⁰

当時から権力闘争が開始され、そして現在もこの闘争は継続し、終わっていない。六〇年前、アメリカの権力保持者達は、アメリカが、二つの世界戦争と国家的破滅もたらした所与の再発を回避するように、自らの力を投入する能力と責任を有していると信じた。

アメリカ人の野心と自らの力への無限の信仰に対して絶えず警告を發したラインホルト・ニーバーは、彼なりに、「アメリカがその責任を全面的に引き受けることが

ない限り、世界問題は解決できない」と信じた。⁴¹⁾

今日アメリカは、この責任を第二次世界大戦の終結時よりもはるかに強い他の自由世界と共に分かち合っている。

将来の世界秩序は、この為に集团的意志と権力を持つ者によって形成される事になる。問題は、世界の自由民主主義諸国がこの挑戦に対応する意欲と能力を有するの⁴²⁾かという事なのだ。

Ⅲ. ケイガンの目指す世界秩序の臨時評価

ケイガンの目指す世界秩序に関する論考をより明確に理解する為には、とりわけ、氏の現状 (Sain) 認識と当為 (Sollen) (あるべき姿) 意識に分けて検討することが必要と考える。

1. ケイガンの現状 (Sain) 認識

ケイガンは、世界秩序の現状を以下のように認識している。⁴³⁾

(一) 冷戦後の願望と現状

ケイガンによれば、冷戦直後、諸国の権力保持者達は、民族諸国家が消滅し、イデオロギー的紛争が解消し、諸文化は混合し、通商と交信は益々自由化し、イデオロギー的諸紛争を終わらせる「新世界」の到来を予測した。⁴³⁾

しかしそれは幻想に過ぎなかった。どこでも民族国家はこれまで通り強力で、民族主義的努力と熱情、歴史を特徴付ける諸国家間の競争は依然としてびくともしていない。アメリカ合衆国は唯一の超大国に留まり、大国間の国際競争が回帰した。ロシア、中国、欧州、日本、インド、イラン、アメリカ合衆国及び他の諸国は、それぞれの地域における支配的地位の為に競争している。⁴⁴⁾

反目は、急進イスラム主義者と現代世俗諸文化及び諸国家間にも発生した。⁴⁵⁾

これら三つの紛争相互作用と衝突を以って、国際接近の新時代の約束は、色褪せ、我々は、再び対立の時代に入り込んでいる。⁴⁶⁾

注目に値するケイガンの認識する現状は、唯一の超大国アメリカと台頭せる諸大国間で支配的地位を巡る競争が行われていることである。しかもケイガンの認識する現状は、現在一般的に言われている「多極構造」ではない。

ましてや、アダム・ロバートの現状認識たる「無極構造」でもない。

ロバートによれば、冷戦後の数年間が示した若干の間違った発想やヴェイジョンの後、「無局世界」が発生した。「無局世界」とは、冷戦時代に該当した二超大国を土台とした国際関係システムでも、又アメリカ主導世界の若干のかつての冷戦後の夢におけるような国際関係システムでもない。

更にケイガンによれば、ロシアや中国の如き独裁統治諸国が台頭し、しかも急進イスラム主義者がその闘争を採用する時代の中で、民主世界は、分裂し、その存在目的とその道徳基盤に疑問を提出し、権力と倫理を巡って争い、遅滞の責任を他者に求めた。この不一致は、民主

諸国を弱体化し、その士気を削いでいる。歴史は回帰したのだ。

ここでは、アメリカを中心とする西側民主諸国がロシアや中国の如き独裁統治諸国の台頭と急進イスラム主義者の挑戦を受けている現状が記述されている。この種の記述は、現状認識として概ね説得的である。

(2) 新秩序への予測の背景と現状

人類史における新時代への大きな希望は、ケイガンによれば、国際状況の特異な構成を裏づけとしていた。

冷戦の間、四〇年以上にわたり、対決は両超大国（米ソ）に限定された。世界に強いたこの強固な二極秩序は、如何なる他の大国も台頭させなかった。

一九九一年ソ連が崩壊し、突然アメリカ合衆国のみが残った。ロシアは弱体化し、中国は、天安門広場事件後は孤立し、インドは、未だ経済革命に到達していなかった。欧州は、権力政治を拒否し、自らのポストモダン諸制度を完成させる方を優先課題とした。

しかしヘンリー・キッシンジャーを始めとする地政学

的現実主義者達は、この構成が永続し得ない点を指摘し、しかも、国際競争は、人間の本性部分であり、遅かれ早かれ再生することになると主張した。

確かに、アメリカ、中国、ロシア、日本及びインド間の概ねの勢力均衡を伴った―来るべきグローバル多極性に関する予測は当たらなかつた。

それでもなお、現実主義者達は、人間の不変の本性を正しく評価した。

冷戦直後世界は、根本的な変遷ではなく、諸国家及び諸民族間の終りなき競争闘争において単に休止したに過ぎない。

九〇年代に次々と台頭を目指す国家が舞台に現れるに至つて、この闘争は再開された。先ずは中国が、次にインドが、突然先例なき経済成長を始めた。日本は、外交的にも、軍事的にも世界の舞台でより積極的が役割を演じ始めた。

更に、石油と天然ガスの輸出を土台として、経済的貧困から恒常的経済成長へと変遷したロシアがこれに続いた。⁵⁰

ここでもケイガンの世界秩序の現状認識の特徴は、「来るべきグローバル多極性に関する予測は当たらなかつた」とする点である。つまり「多極構造」の否定である。しかしその他の諸点でケイガンは、地政学的現実主義者達たるヘンリー・キッシンジャーの国際競争が人間の本性部分であり、遅かれ早かれ再生することになるとの主張に同調し、世界が根本的な変遷ではなく、諸国家及び諸民族間の終りなき競争闘争において単に休止したに過ぎないと断じている。

しかも今日では、ケイガンによれば、国際秩序が新たな権力構造によつて再編され、我々は、「唯一の超大国と複数の大国」が並存している世界の中に生きている。民族主義と民族自体は、今日では、グローバル化によつて決して弱体化していないどころか、権力を伴つて回復している。

新世界秩序に代わつて、諸大国の対立した利害と努力は、再び同盟、反対同盟及びパートナー交代を伴つた将来の反目の蓋然性を非常に高めていく。⁵¹

このようにケイガンは、現状を再三にわたって、「多極構造」ではなく、「唯一の超大国と複数の大国」が並存している世界であると記述している。

(3) 一九世紀的ロシアと二一世紀的EU

ケイガンによれば、ロシアでの自由主義への転機は停止し、しかも反転した。今日ロシアは、大国民族主義に回帰した。

ロシアとEUは、確かに地理的には隣国であるが、地政的観点からすれば、異なつた世紀の中に生きている。

その重大事項が権力政治を克服し、世界を法律と諸制度に基づく秩序を目指す二一世紀のEUは、未だに大幅に一九世紀の国家で、しかも古い権力政治を実践しているロシアに對峙している。

EUのポストモダン、「ポストナショナル」な精神を以つて、欧州は、民族主義と権力政治が大陸を二回も破壊した恐るべき二〇世紀の紛争に對峙した。

これに對してロシアの態度は、ソ連崩壊後の「ポストナショナル政治」の不能によつて刻印されている。

ヨーロッパの悪夢は、二〇世紀の三〇年代であり、ロ

シアの悪夢は、ソ連崩壊の九〇年代である。ヨーロッパは、その諸問題の解決を民族国家とその権力の克服に求めるに對し、ロシアにとつて、回答は権力の再現にあるのだ。

EUの如き二一世紀に所屬する国家形態がロシアの如き伝統的一九世紀的國家の挑戦を受ける場合、何が起るか。つまり「我々は、現在地政学時代に生きている事実を否定することができない。」ことになる。

九〇年代において自由民主諸國は、より豊かなロシアが内政及び対外政策において、自由なロシアとなることを確信した。

しかし歴史は、通商と繁榮の拡大が必ずしも、諸國間のより大きな調和ではなく、しばしばより大きな世界規模の競争に導くことを示している。

冷戦の終結後、諸國が地政学的競争への対案として、経済統合を推進し、軍事力や地政学的対決の「ハード」権力に對し、通商関係や経済成長の「ソフト」権力を優先させるとする願望が存在した。

しかし未だに他のパラダイムが存在し続けている。ロ

シアと中国は、地政学的闘争を放棄するのではなく、この闘争を成功裏に遂行する為に、西側諸制度への経済的統合と順応を目指さないのである。⁵³

ケイガンの歴史認識によれば、歴史は、通商と繁栄の拡大が必ずしも、諸国間のより大きな調和ではなく、しばしばより大きな世界規模の競争に導くことを示しているのだ。ここでは啓蒙主義への信奉に疑念が提示されている。

（4）独裁制と国家的繁栄

ケイガンによれば、共産主義は、歴史の舞台から降りたが、民主制に対する強力な挑戦者達は残った。国家的繁栄と独裁制の増大は究極的に互換性があることが証明された。独裁者達は、学習し、かつ順応する。

ロシアと中国の独裁制は、自由経済を認可し、同時に政治活動を弾圧する方法を発見した。新たな豊かさは、独裁諸体制により多くの情報統制を付与する。

長期的には、確かに豊かさの増大が政治的自由化に導きえる。しかし何時かについては分からない。何等かの

戦略的あるいは地政学的比重を持つに至るまでにはあまりにも長すぎる。

世界は確かに変化を期待している。しかし現在では、二国（中露）が総じて一五億以上の人口と第二と第三番目の軍事力を伴った独裁によって統治され、見通しえる将来も権力を保持しえると予測される。⁵⁴

ケイガンの現状認識の特徴は、独裁制が順応・学習能力を有し、国家的繁栄と独裁制の増大に互換性がある事実である。つまり、経済的繁栄が必ずしも政治的自由化に導かない事実である。現実が理論に抵抗したのだ。

（5）独裁制の魅力

ケイガンによれば、独裁制が国際的にいかなる魅力もないと信ずる事は間違いだ。中国は今日、開かれた経済と閉鎖的な政治体制の組み合わせの経済発展モデルが多くの諸国にとって、成功を約束する選択肢であり得ると主張できる。ロシアモデルは、中央アジアにおける諸独裁制にとって極めて魅力的だ。中国及びロシアの成功を背景として、今日このモデルは、より良い選択肢である

かのような印象を与えている⁽⁵⁵⁾。

中国とロシアは、独裁者達に逃げ場を提供できるし、実際に提供もしている。

この競争がベルリンの壁の崩壊を以って終結したと考えた西側世界にとつては驚きである。民主的諸政権と独裁的諸政権間のグローバルな競争は、二一世紀の世界を決定付けることになる⁽⁵⁶⁾。

経済的に成功した独裁制が、他の独裁制にとつてとりわけ魅力的であることは、上海協力機構（SCO）からも推定可能である。二〇〇七年の会議で上海協力機構は、五つの独裁諸国（中国、ロシア、ウズベキスタン、カザクスタン、タジキスタン）にイランを加えた会議を行った。

(6) 独裁制のクラブと民主制のクラブ

ケイガンによれば、独裁者制のクラブと民主制のクラブ間のグローバル規模の分裂は、国際システムに対する広範囲にわたる帰結を伴う。

結局『国際共同体』の存在には疑問が提示される。こ

の概念は、国際法的行動規範に関する了解、国際関係の倫理、国際的良心を前提とする。今日では、諸大国間に合意が欠落している。

これが明らかになったケースは、民主的西側諸国とロシア、中国及び非欧州独裁諸国を分けたコソボ戦争であり、ダルフル、イラン及びミャンマーで示されている。今日強力に前面に現れた国家的及びイデオロギー的競争の重圧を通商関係のみで緩和できると考える事は間違いだ。通商関係は、空気が空気で行われるものではなく、支配的地政学的及びイデオロギー的紛争との恒常的相互作用下に置かれている⁽⁵⁷⁾。

ここでは、国際関係における経済至上主義に対して警告が発せられている。つまり、イデオロギー的競争や地政学的紛争が、通商関係の円滑化によって、全て解決するものではない事実が指摘されている。

2. ケイガンの当為 (Sollen) 意識

ケイガンの目指す世界秩序のあるべき姿 (Sollen) は、以下のように記述される。

（一）現世界秩序におけるアメリカの役割

ケイガンによれば、アメリカは、たとえ、国際的世論調査が国際システムの中でアメリカの役割を縮小し、より多くの多様性と平等に作用しようとする強い願望が存在していると説明され、しかもアメリカ内部でも、自制、野望の抑制、自己の限界に対する明確な意識への呼びかけが高まっているとしても、民主的超大国たるアメリカは、重要な放棄できない任務を遂行すべきなのだ。⁵⁸

アメリカの優越的地位が即急には消えない事は、世界の多数がこれを望まないが故に、确实だ。アメリカは、確かに、利己的で、他の諸国の利益の邪魔もし、傷つけえるし、実際にそうしてもいる。しかしロシア、中国、インド、日本あるいは欧州が多極世界において、その権力行使に際して、より賢明に、道徳的に行動する事は、全く証明されない。しかもこの多極の世界秩序の新たな側面は、これらの諸大国のほとんどが核兵器を持っている事実だ。

東アジアの大抵の諸国は、信頼性があり、指導的役割を演ずるアメリカが安定的、平和創設的影響力を行使で

きると言う点で一致している。この地域の支配勢力としてのアメリカを排除しようとする中国も、アメリカの撤退が独立した民族主義的日本を自由に行動させるというジレンマに立たされている。

世界最強国家アメリカが国際舞台から降りる場合、欧州に対しても、不安定な影響を及ぼす。

ロシアは、自己の辺境における反抗的な諸国に対して、より尊大かつ潜在的に暴力的に対応する事を試み得る。⁵⁹

近東におけるアメリカのより弱い立場がより多くの安定化に導くとの考えも同様に樂觀的に過ぎる。アメリカが撤退するに従って、この地域あるいはその他の地域の別の勢力が即座に真空を満たすことになる。

世界秩序は、諸理念と諸制度のみを土台としているのではなく、権力構成によって刻印されている。

九〇年代の世界秩序は、第二次世界大戦と冷戦後の世界における権力配分を反映しており、今日の秩序は、独裁制を含む諸大国の増大する影響に対応している。

別の権力構成、つまりロシア、中国、アメリカ、イン

ド及び欧州を伴った多極世界は、これに共同参画する諸勢力の利害に合致する他の諸規定と諸規範を伴った固有の秩序をもたらす。

この国際秩序（多極世界）は改善を意味しない。多分ロシア、中国あるいはイランにとつては改善かもしれない。これが、現在のシステム以上にアメリカ及び欧州における啓蒙民主主義者の利害に合致するかは疑問だ。⁶⁰

現代の大誤謬は、自由主義的世界秩序が諸理念の勝利と人類進歩の自然的展開に基づいているとの信奉である。当然のことに多くの潜在力が自由民主制の理念と自由市場経済の中に潜んでいる。長期的には自由民主制と自由市場経済は、対案的世界観に対して、自己貫徹すべきであろう。この二者が、物質的財を提供し、人間本性の全く本質的側面に対応するからだ。その本質的側面とは、個人的自立、承認、思想の自由、良心の自由への欲求である。自由民主諸国からなる世界が、徐々に、この自由民主的諸特性を反映する国際秩序をもたらすべきとする期待も論理的だ。

しかし民主制の広がり、経済的及び政治的發展の一定の不可避な過程のみに従ったものではない。このような進化論的過程が予言可能な段階と周知の原因と結果を伴って存在しているか否かさえ我々は知らない。⁶¹

しかし我々が知っている事は、自由民主制へのグローバル規模の移行が自由民主的理念に優先権を与えた諸国家及び諸民族への勢力均衡における歴史的移行と時を同じくしている事実である。この移行は、第二次世界大戦におけるファシズムに対する民主的諸勢力を以つて始まり、冷戦における共産主義に対する民主諸国の第二の勝利が続いた。この両勝利の後に発生した自由世界秩序は、自由な諸勢力の世界的規模の圧倒的優勢に合致した。

それでもなおこれらの勝利は必然ではなく、又永続的でなければならぬものでもない。今日、独裁的諸大国の再強化は、イスラム急進主義の反動的諸勢力と一緒になつて、この（自由世界）秩序を弱め、しかも、この秩序は、来るべき数年及び数十年の間に益々弱まる危険に晒されている。⁶²

第二次世界大戦後、新規な世界秩序への希望に満ちたとき、ハンス・モルゲンソウは、何時か「最後の幕が下り、最早権力政治が演じられないようになる」という考えに警告を發した。当時から権力闘争が開始され、そして現在もこの闘争は継続し、終わっていない。

六〇年前、アメリカの権力保持者達は、アメリカが、二つの世界戦争と国家的破滅もたらした所与の再発を回避するように、自らの力を投入する能力と責任を有していると言じた。

今日アメリカは、第二次世界大戦の終結時よりもはるかに強い他の自由世界と共にこの責任を分かち合っている。

将来の世界秩序は、ケイガンによれば、この為に集团的意志と権力を持つ者によって形成される事になる。問題は、世界の自由民主主義諸国がこの挑戦に対応する意欲と能力を有するののかという事だ。

おわりに

既に見てきた通り、ケイガンの認識する現状の世界秩

序は、アメリカ合衆国が唯一の超大国に留まり、諸大国間の国際競争が回帰し、ロシア、中国、欧州、日本、インド、イラン、アメリカ合衆国及び他の諸国がそれぞれの地域における支配的地位の為に競争している状態である。

ここでは、一極構造も、多極構造も、無極構造も否定されている。

このような現状認識（唯一の超大国と諸大国間の合従連合による競争）こそが、アメリカの地位が、第二次世界大戦直後のそれと比べるならば、相対的に低下しているものの、世界秩序の現状を最も的確に記述しているように思われる。

更に、ケイガンの目指す世界秩序のあるべき姿（Sollen）は、やはり一極構造でも、多極構造でも、ましてや無極構造でもない。つまり、ケイガンの目指す世界秩序の中では、これまで通り唯一の超大国としてのアメリカの主導下に自由民主諸国が結束して、独裁諸国及びセミ独裁諸国と対峙する構造の方が良しとされている。至極説得的な結論と看做される。

- (1) Robert Kagan, *Geschichte, die nicht enden will*, in: *Internationale Politik* (IP), Juli/August 2008, S.36-48; ※
 ② Robert Kagan, *The Return of History and the End of Dreams*, London 2008, *Die Demokratie und ihre Feinde. Wer gestaltet die neue Weltordnung? München 2008; Of Paradise and Power: American and Europe in the new World Order*, New York 2003; *Macht und Ohnmacht: Amerika und Europa in der neuen Weltordnung*, Berlin 2003; 小林宏晨「力と脆弱：ロバート・ケイガン理論の批判的評価」政経研究第四〇巻第三号（平成一五年一二月一〇日）’一一八五頁参照。
- (2) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.36; *The Return*. (社一) (2008), p.3; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.7
- (3) Robert Kagan (社一) (IP) (2008), S.36f.; *The Return*. (社一) (2008), p.4; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.8
- (4) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.37; *The Return*. (社一) (2008), p.4; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.8
- (5) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.37; *The Return*. (社一) (2008), p.5; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.9
- (9) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.37; *The Return*. (社一) (2008), p.5; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.9
- (7) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.38; *The Return*. (社一) (2008), p.6; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.10
- (8) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.38; *The Return*. (社一) (2008), p.6; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.10
- (5) (社一) (2008), p.6; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.10
- (6) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.38; *The Return*. (社一) (2008), p.6; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.10f.
- (10) Martin Walker, *The Clinton Doctrine*, *The New Yorker*, October 7, 1996; Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.38; *The Return*. (社一) (2008), p.8; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.12
- (11) Michael Mandelbaum, *The Ideas The Conquered the World: Peace, democracy and Free Markets in the Twenty-first Century*, New York 2002, p.37f.; Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.39; *The Return*. (社一) (2008), p.8; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.13
- (12) G. John Ikenberry, *Liberal International Theory in the Wake of 9/11 and American Unipolarity*, paper prepared for seminar, "IR Theory, Unipolarity and September 11th - Five Years On," NUIPI (Norwegian Institute of International Affairs), Oslo, Norway, February 3-4, 2006; Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.39; *The Return*. (社一) (2008), p.9; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.13
- (13) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.39; *The Return*. (社一) (2008), p.9; *Die Demokratie*. (社一) (2008), S.13
- (14) Robert Kagan, *Power and Weakness*, in: *Policy Review*, No.113, June 2002, S.16; Robert Cooper, *The new liberal imperialism*, in: *Observer*, Sunday, April 7, 2002; ↯

- 林宏農, (注一) 三〇頁以下参照。
- (15) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008), S.39f. The Return. (注一) (2008), pp.10; Die Demokratie. (注一) (2008), S.13ff.
- (17) Rosalie Chen, China perceives Amerika; Perspectives of International Relations Experts”, *Journal of Contemporary China* 12, no 15 (May 2003), p.287
- (18) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008), S.40; The Return (注一) (2008) p.12; Die Demokratie, (注一) (2008), S.16f.
- (19) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008), S.40f.; The Return (注一) (2008) p.12f.; Die Demokratie, (注一) (2008), S.17f.
- (20) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008), S.41; The Return (注一) (2008) p.19f.; Die Demokratie, (注一) (2008), S.24f.
- (21) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008), S.41f.; The Return (注一) (2008) p.24; Die Demokratie, (注一) (2008), S.29f. Quoted in Vinocur, “Scandinavia’s Concern? Russia, Russia, Russia.” p.2
- (22) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.42 The Return (注一) (2008) p.57f.; Die Demokratie, (注一) (2008), S.64
- (23) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.42f. The Return (注一) (2008) p.69; Die Demokratie, (注一) (2008), S.76
- (24) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.43 The Return (注一) (2008) p.70f.; Die Demokratie, (注一) (2008), S.78; Russian foreign minister Sergei Lavrov, “The Present and Future of Global Politics”, *Russia in Global Affairs*, no.2 (April/June 2007)
- (25) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.43 The Return (注一) (2008) p.71ff.; Die Demokratie, (注一) (2008), S.78ff.
- (26) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.43f. The Return (注一) (2008) p.73; Die Demokratie, (注一) (2008), S.80f.
- (27) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.44 The Return (注一) (2008) p.73f.; Die Demokratie, (注一) (2008), S.81f.; Wayne Arnold, “Southeast Asian Pact Exposes Rifts”, *New York Times*, November 21, 2007
- (28) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.44f. The Return (注一) (2008) p.76; Die Demokratie, (注一) (2008), S.83f.
- (29) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.45 The Return (注一) (2008) p.80; Die Demokratie, (注一) (2008), S.88
- (30) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.45 The Return (注一) (2008) p.80; Die Demokratie, (注一) (2008), S.88f.
- (31) Robert Kagan, (注一) (IP) (2008) S.45 The Return (注一) (2008) p.83; Die Demokratie, (注一) (2008), S.91; F. Gregory Gause III, “Can Democracy Stop Terrorism?” *Foreign Affairs* 84, n.5 (September/October 2005), p.69;

- Bernard Lewis, *The Middle East* (London 2000), p.377
- (32) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.45f. *The Return* (社一) (2008) p.83f.; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.91f.
- (33) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.46; *The Return* (社一) (2008) p.85f.; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.93f.
- (34) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.46 *The Return* (社一) (2008) p.86, 92, 93f.; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.94, 100, 102
- (35) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.46 *The Return* (社一) (2008) p.94; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.103
- (36) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.46f. *The Return* (社一) (2008) p.95; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.103
- (37) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.47 *The Return* (社一) (2008) p.96f.; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.105
- (38) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.47; *The Return* (社一) (2008) p.102ff.; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.111ff.
- (39) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.47f. *The Return* (社一) (2008) p.104f.; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.113f.
- (40) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.48 *The Return* (社一) (2008) p.105; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.114; Hans J.Morgenthau, *Politics Among Nations.: The Struggle for Power and Peace*, New York 1948, p.20
- (41) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.48 *The Return* (社一) (2008) p.105; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.114; Reinhold Niebuhr, *American Power and World Responsibility: Chriantianity and Crisis*, April 5,1943, in D.B.Robertson, ed.*Love and Justice: Selections from the Shorter Writings of Reinhold Niebuhr*, Cleveland 1967, p.200.
- (42) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.48 *The Return* (社一) (2008) p.105; *Die Demokratie*, (社一) (2008), S.114;
- (43) RobertKagan, (社一) (IP) (2008), S.36; *TheReturn*, (社一) (2008), p.3; *DieDemokratie*, (社一) (2008), S.7
- (44) RobertKagan, (社一) (IP) (2008), S.36; *TheReturn*, (社一) (2008), p.3; *DieDemokratie*, (社一) (2008), S.7
- (45) RobertKagan, (社一) (IP) (2008), S.36; *TheReturn*, (社一) (2008), p.3; *DieDemokratie*, (社一) (2008), S.7
- (46) RobertKagan, (社一) (IP) (2008), S.37; *TheReturn*, (社一) (2008), p.4; *DieDemokratie*, (社一) (2008), S.8
- (47) RobertKagan, (社一) (IP) (2008), S.36; *TheReturn*, (社一) (2008), p.3; *DieDemokratie*, (社一) (2008), S.7
- (48) Adam Roberts, *Wer die nichpolare Welt regiert*, in: *IP Juli/August 2008*, S.11ff.;

小林宏晨「アダム・ロバートの理解する冷戦後の世界構造」防衛法研究, 第三四号 二〇一〇年二〇九頁以下参照。

- Development and Democracy, *Foreign Affairs* 84, no.5, September/October 2005, p.78, 85
- (15) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.42f.; The Return (社一) (2008) p.69; Die Demokratie, (社一) (2008), S.76; Mark Leonard and Nicu Popescu, A Power Audit of EU-Russia Relations, 7.November 2007, (European Council on Foreign Relations, p.8
- (16) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.43 The Return (社一) (2008) p.69ff.; Die Demokratie, (社一) (2008), S.76ff.;
- (17) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.44f. The Return (社一) (2008) p.76; Die Demokratie, (社一) (2008), S.83f.
- (18) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.46 The Return (社一) (2008) p.85f.; Die Demokratie, (社一) (2008), S.93f.
- (19) RobertKagan, (社一) (IP) (2008) S.46; The Return (社一) (2008) p.86, 94; DieDemokratie, (社一) (2008), S.94, 102
- (20) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.47 The Return (社一) (2008) p.96f.; Die Demokratie, (社一) (2008), S.105
- (21) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.47 The Return (社一) (2008) p.102f.; Die Demokratie, (社一) (2008), S.111
- (22) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.47f. The Return (社一) (2008) p.104f.; Die Demokratie, (社一) (2008), S.
- 小林宏晨「アダム・ロバートの理解する冷戦後の世界構造」防衛法研究, 第三四号 二〇一〇年二〇九頁以下参照。
- (17) RobertKagan, (社一) (IP) (2008), S.37; TheReturn. (社一) (2008), p.4; DieDemokratie. (社一) (2008), S.8
- (18) RobertKagan, (社一) (IP) (2008), S.39f.; The Return. (社一) (2008), p.10ff.;
- Die Demokratie. (社一) (2008), S.15f.
- (19) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.40; The Return (社一) (2008) p.12; Die Demokratie, (社一) (2008), S.16f.; Rosalie Chen, Chana perceives America: Perspectives of International Relations Experts, in: Journal Contemporary China 12, No.15, May 2003, p.287
- (20) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.41; The Return (社一) (2008) p.19f.; Die Demokratie, (社一) (2008), S.24f.; Ivan Krastev,Russia v. Europe.The Sovereignty Wars, published on the Web site OpenDemocracy, Setember 5, 2007
- (21) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008), S.41f.; The Return (社一) (2008) p.24; Die Demokratie, (社一) (2008), S.29f..
- (22) Robert Kagan, (社一) (IP) (2008) S.42 The Return (社一) (2008) p.57f.; Die Demokratie, (社一) (2008), S.64; Bruce Bueno de Mesquita and George W. Downs,

113f.

(註2) Robert Kagan, (註一) (IP) (2008) S.48 The Return

(註一) (2008) p.105; Die Demokratie, (註一) (2008), S.
114

